

ハイデガーにおける「存在史的思索」の変遷について

—1936年から40年まで

小林昌平(早稲田大学)

マルティン・ハイデガー(1889-1976年)は、1936年から1938年に執筆していた『哲学への寄与(エアアイグニスより)』を皮切りに、自身の根本的思索「存在史的思索」の道へと歩み入ってゆく。『哲学への寄与』ではこの思索の全体像が語られている。形而上学の歴史である「はじめの原初」の歴史から、これを「存在の真理(Wahrheit des Seyns)」に基づき新たな仕方で見出すための地平である「別様の原初」の歴史への転換、これがそこでは試みられている。

『哲学への寄与』におけるこの試みの記述によって「存在史的思索」は実のところ完結したわけではない。ハイデガーはその後もドイツ敗戦前後までにわたって、同時代の状況を取り入れつつ、同時に自身の用いる語をも幾度となく刷新することで、この思索を多様な、そしてよりよい仕方で語り出そうと奮闘している。本発表では、そうしたハイデガーの苦闘の道のりを子細に、そして最後まで辿るための着手点として、『哲学への寄与』(1936年から38年、全集65巻)を起点に、『省察(Besinnung)』(1938年から1939年執筆、全集66巻)、『存在の歴史(Geschichte des Seyns)』(1938年から40年執筆、全集69巻)という三つのテキストを取り上げ、「存在史的思索」としてハイデガーが自身をそこに投じたものの変遷を取り扱うことにしたい。

この三つのテキストに着目する理由は二つ存在する。第一に、「存在史的思索」の中でも、この三つの著作に強い関連性がみとめられるためである。この思索に含まれると考えられるテキストとしてほかに、『原初について(Über den Anfang)』(1941年執筆、全集70巻)『エアアイグニス(Das Ereignis)』(1941年から1942年執筆、全集71巻)といったより後の年代のものが挙げられるが、この二つのテキストと前三テキストの間には、顕著な違いがある。第一に、前三テキストでハイデガーは形而上学の歴史全体を見据えつつ、プラトンから現代までの「存在の歴史」を論じている。それに対し後二テキストでは、その歴史の中でも特にフォアブクラーティカーへの言及が中心になっている。第二に、後二テキストでは、前三テキストで用いられていなかったヘルダーリン由来の新たな語彙が中心的に用いられ、ハイデガーがこの思索を語るための語そのものが大胆に変化している。第三に、特に後二テキストにおいて、「詩作」と「思索」の関係が主題的に取り上げられ、考察されている(例えば、『哲学への寄与』においてはヘルダーリンの名は登場するものの、こうした考察は全くない)。少なくとも形式上では明らかなこれらの断絶から、「存在史的思索」は大きく前半と後半に分けられると言える。本発表では、その前半の三つのテキストを扱う、というわけである。

その上で、三つのテキストを通した変遷を問題にする以上、『哲学への寄与』が書き始められた1936年から、『存在の歴史』が執筆されていた1940年まで、ハイデガー本人および周囲の出来事を、少なくとも年ごとには区別して、可能な限り参照する必要がある。というのも、この年代はハイデガーがいわゆる「ニーチェ講義」を行っていた時期でもあり、加えて1934-1935年冬学期に一度行われ、1940年代に再び連続して行われるヘルダーリン関連の講義の間に位置し、彼がこの詩人に集中的に取り組んだに違いない時期でもあるからである。と同時に、この時期にドイツは本格的に第二次世界大戦へと突入していくのであり、ハ

イデガーも、その間に起こった様々な出来事(例えば独ソ不可侵条約(1939年)、日独伊三国同盟(1940年))に対して、直接的ではないにせよ言及を行っているからである。これらに加えて、30年代のハイデガーを論ずる上で、この時期顕著であった彼の政治的側面、すなわちナチス加担の影響を無視することはできない。こうした問題を鑑みつつ、多側面的にハイデガーの思索の変遷を検討しなければならない。

『哲学への寄与』に関しては既に膨大な研究が存在するが、それ以降の『省察』『存在の歴史』などに関して、各テキストの特徴を分析しつつ変遷を描くものはほとんどないと言ってよい。本発表では、この変遷を、はじめにできる限りテキストの資料的側面(同時期の講義録や、他の生前未公開であった草稿・ノート群、およびドイツ国内での政治的・学問的な事件との関係)から検討しつつ、そこから推定可能な各テキストの執筆時期およびそれに特徴的な時代性を検討する。その際有効な限りで、「存在史的思索」のための草稿群『エアアイグニスの思索について(Zum Ereignis-Denken)』(おそらく1930年代前半から30年ほどにわたって執筆、全集73巻)も参照する。

もちろんこれは資料的な分析にとどまらない。ハイデガーは、『省察』『存在の歴史』の中で、『哲学への寄与』で立ち上げられた試みを振り返りつつ、自己反省を加えているからである。つまり、「存在史的思索」そのものもまた——ハイデガーが自身の思索を振り返って言ったように——「道」なのである。こうした前提に基づいて、上で行った資料的分析を加味して、各テキストにおけるハイデガーの関心の変化が「存在史的思索」をどのように変化もしくは深化させていったのか——それとも、そもそも本質的な影響は見いだせないのか——を検討する。